

# 青年期の愛着スタイルと感情の調節と感受性ならびに 対人ストレスコーピングとの関連<sup>1)</sup>

## ——幼児期と青年期の愛着スタイル間の概念的—貫性についての検討

金 政 祐 司

相愛大学人文学部人間心理学科

本研究は、青年期の愛着スタイルと感情調節ならびに対人ストレスコーピングとの関連についての検討を行った。研究1では大学生460名を対象に、青年期の愛着スタイルと感情調節との関連を検討した。その結果、安定型愛着スタイル傾向は、感情の表出性や感受性と正の関連を、反対に、アンビバレント型傾向は、それらと負の関連性を示していた。また、愛着次元からの分析では、“関係不安”は、感情の感受性に、“親密性回避”は、表出性にネガティブな影響を与えていた。さらに、統制については、それら2次元軸の交互作用が見られ、“関係不安”が低い場合に“親密性回避”の影響が認められた。研究2では、大学生393名について、青年期の愛着スタイルと対人ストレスコーピングとの関連について検討を行った。その結果、安定型傾向は、ポジティブ関係コーピングと正の関連を、ネガティブ関係コーピングとは負の関連を示しており、不安定型の愛着傾向は、ネガティブ関係コーピングと正の関連を示していた。愛着次元からの分析では、“関係不安”の影響は、ネガティブ関係コーピングおよび解決先送りコーピングにおいて見られ、“親密性回避”の影響は、ポジティブ関係コーピングで認められた。これらの結果について、幼児期と青年期の愛着スタイルの概念的な対応性の観点から議論を行った。

キーワード：青年期の愛着スタイル、愛着次元、ストレスコーピング、ノンバーバルスキル、感情

### 問 題

成人の愛着理論 (Hazan & Shaver, 1987; Shaver & Hazan, 1988) は、動物行動学的な視点から導き出された Bowlby (1969/2000, 1973/2000) の愛着理論をその基礎としている。Bowlby の愛着理論の骨子は、幼児は自身の安全性と生存性を確保するために養育者との近接性を維持しようとする、より具体的に言えば、広義な意味での“安心感 (attachment security)” を獲得するために子どもは

養育者との近接性を保とうとするということになる。

さらに、Bowlby (1973/2000) は、そのような生得的システムとしての愛着について理論的な展開を図ると同時に、養育環境や後の対人関係によって形成される愛着の個人差に関しても言及している。この見解を踏まえて、Ainsworth, Blehar, Waters & Wall (1978) は、ストレンジ・シチュエーション法 (Strange Situation Procedure; SSP) という手法を用い、幼児の養育者との分離経験から観察された反応パターン、つまりは愛着スタイルの分類を行った。その後、Hazan & Shaver (1987) は、そのような分類が幼児期の母子関係だけではなく、その関係で培われた期待や信念が個人に内

1) 本論文で使用したデータは、著者が大阪大学大学院人間科学研究科に在籍中に収集したものである。なお、本研究の一部は、日本社会心理学会第45回大会において報告された。

在化し（内的な作業モデルが形成され）、継続性を持つことで、成人期での恋愛関係にまで適応できるものと考え、大規模なサンプルを用いて研究を行い、それを支持する結果を得ている。さらに、彼女らは、自らの研究結果と共に、母子関係と恋愛関係の共通項を指摘することで、それら双方を愛着関係であると定義づけ、愛着スタイルという概念の成人期への拡張を行った (Shaver & Hazan, 1988).

Hasan & Shaver (1987) の研究では、SSP での知見を踏まえ、愛着スタイルを安定型、アンビバレント型、回避型の3つに分類する手法が使用されていたが、後に、Bartholomew & Horowitz (1991) は、Bowlby の主張する自己および他者への作業モデル（自己および他者への期待や信念）という概念を愛着スタイルの分類法に用いることで、愛着の4カテゴリー・モデルの提唱を行った。この愛着の4カテゴリー・モデルでは、自己および他者の両作業モデルが、ポジティブ・ネガティブの二つの極を持ち、それらが直交することで愛着スタイルは4つに分類される（“安定型” (secure), “とらわれ型” (preoccupied), “回避型” (dismissing), “恐怖型” (fearful)). また、この愛着スタイルの4類型では、一般的に3類型での回避型が、“回避型”と“恐怖型”に分化されたものと考えられている。さらに、Brennan, Clark & Shaver (1998) によると、4カテゴリー・モデルにおいては、自己モデルの低さは関係への不安として、他者モデルの低さは親密性からの回避として捉えられ、それらは愛着の二つの次元軸として理解されたとの見解を示している<sup>2)</sup>。このように成人の愛着スタイルという概念が精錬化され、それが広く流布してからというもの、成人の愛着スタイルに関する研究はこれまで数多く行われてきており、また、それらの多数が、成人期における愛着スタイルという分類の妥当性ならびにその理論的背景との整合性を示してきている。

その中のひとつの潮流として、成人の愛着スタ

イルと感情との関連を検討した研究がある。これまでに、愛着スタイルと感情経験やその表出性との関連を検討した研究は数多く提出されており (e.g., Feneey, 1995; Feeney & Noller, 1990; Hazan & Shaver, 1987), それらの研究では概ね一貫して、安定型の愛着スタイルは、ポジティブな感情経験とは正の、ネガティブな感情経験とは負の関連があり、反対に不安定型（アンビバレント型・回避型）の愛着スタイルは、安定型とは逆の傾向が見られることが示されている。また、結婚したカップル間の特定の感情経験や表出について検討を行った Feeney (1999) の研究では、不安定な愛着傾向（関係への不安ならびに親密性からの回避の高さ）は、怒り、悲しみ、不安といったネガティブな感情の頻繁な経験と、反対に、幸せ、愛、プライドのようなポジティブな感情の経験しづらさとの関連が示された。さらには、不安定な愛着傾向は、それらポジティブ・ネガティブ、両感情の表出を統制する傾向があることが報告されている。

これらの研究結果は、成人の愛着スタイルと感情経験や感情表出との関連性が比較的堅固なものであることを示すと共に、幼児期の愛着スタイルの分類が、SSP での養育者との分離時における感情経験やその表出性といった反応のパターンに起因することを考えれば、それらの関連性によって、成人期と幼児期の愛着スタイルの共通部分を示され得ていると言えるであろう。

2) これらの二軸は、幼児においても見受けられており、たとえば、Stayton & Ainsworth (1973) では、幼児の母親との分離と再会に対する反応を因子分析した結果、泣き行動に関する変数が高く負荷する不安として理解される因子と、身体的な接触に関する変数が高く負荷する回避行動として理解される因子を抽出している。さらに、Ainsworth et al. (1978) でも幼児の3つの愛着スタイルを区別するための機能として、anxious/resistant vs. non-anxious/resistant ならびに avoidant vs. non-avoidant を挙げており、これらは青年期の愛着次元の関係不安ならびに親密性回避に対応するものであると考えられる。

また、愛着スタイルと感情との関連は、その経験や表出性に限られているわけではない。それは、Bowlby 自身が愛着の個人差（スタイル）と感情との関連について重要な示唆を与えていることから理解できる。Bowlby (1973/2000) によると、幼児期における愛着関係の性質は、幼児に対する養育者の受容性や反応性によって概ね規定されおり、それらは他者モデル（親密性からの回避）の発達に関連するが、それと共に、そのような養育者の受容性や反応性を幼児がいかに関与するか、つまり、自分が愛されているかどうかをどのように感受するかが自己モデル（関係への不安）の発達には重要であるとしている。それゆえ、他者（幼児期では主に養育者）の感情についての感受性も愛着スタイルの形成や継続に強く関わってくるのである。

ところで、Ainsworth et al. (1978) による SSP での幼児期の愛着スタイルの分類において、感情の経験や表出と共に重要な要素となってくるのが、ストレス状況下におけるコーピングストラテジーである。つまり、SSP では、分離苦悩というストレスに対して、それをいかに処理するかということが、愛着スタイル間の相違として認識されることになる。さらに、そのようなストレスのコーピングストラテジーは、上述の感情経験やその表出性とも密接に関連するものである。

たとえば、Simpson, Rholes & Nelligan (1992) の研究では、実験的にストレス状況下におかれた女性の参加者の親密性回避傾向の低さは、関係不安が低い場合に、自身の苦痛を低減するためのサポート探索行動（相手への接触や密着）の多さを、言い換えれば、感情の表出性の高さを予測し得るという結果が示されている。さらに、アンビバレント型の人には、関係葛藤時において、ネガティブな感情に焦点を当ててしまう傾向があるために、深刻な苦悩を抱え込みやすいといった報告がなされており (Simpson, Rholes & Phillips, 1996)、これらの研究結果は、それら論文でも議論されている

ように、異なった愛着スタイルが幼児期におけるストレス処理や感情の調節といった経験を反映するという主張 (Ainsworth et al., 1978) と一貫性を示すものである。

これまで述べてきたように、Ainsworth et al. (1978) の SSP において分類された愛着のスタイルは、いわば、個々の感情表出、もしくは統制の相違を示しているものであり、さらに言えば、それらは幼児自身の安心感が満たされない状況におけるストレスのコーピングストラテジーの違いを示したものと考えられる。そして、Bowlby の主張するように、幼児期での関係性が個人の内的作業モデルを形作り、その継続性によって、愛着スタイルが人生全般にまで影響を及ぼすのであれば、本研究で扱う青年期の愛着スタイルに関しても、SSP での幼児の反応パターンと類似するように、感情の表出、統制や感受性、対人ストレスに対するコーピングと関連を示すものと思われる。これらの関連性を検討することは、愛着スタイルが対人関係の適応性に与える影響についての重要な示唆が得られると共に、青年期における愛着スタイルと幼年期の愛着スタイルとの間の概念的な一貫性を検証することにもなり得る。

これまで、青年期と幼年期の愛着スタイルの概念的な一貫性については、Hazan & Shaver (1987) や Mikulincer & Nachshon (1991)、Feeney & Noller (1990) などの研究で、幼児期での両親との関係や両親への印象、母親との分離経験に関して愛着スタイル間に違いが見られたことによって示されてきたと言える<sup>3)</sup>。しかしながら、これまで議論してきたように、青年期の愛着スタイルと幼

3) それらの研究では、安定型の人には、アンビバレント型や回避型の人と比べて、幼年期の母親や父親との関係を温かいものであったと考えており、また、主に母親に対してポジティブなイメージを持っていること、さらに、幼年期に母親との分離苦悩を経験しなかったと回答する傾向があったことなど、その理論的背景に整合する形で両親との関係の経験に愛着スタイル間の相違が見られている。

年期のそれとの概念的な一貫性を考える場合には、上記の結果だけではなく、愛着スタイルと感情の調節や感受性、また、コーピングスタイルとの関連性について検討する必要がある。それゆえ、本研究では、それらの関連性を示すことで、青年期と幼年期の愛着スタイルの概念的な一貫性について検討を行うことを目的とする<sup>4)</sup>。

もちろん、このような青年期と幼年期の愛着スタイル間の概念的な一貫性を問う場合、幼児期のそれが SSP というストレス状況下における母子関係での反応性によって、その分類が行われていることから、愛着スタイル間の違いは、ある特定の状況や関係（脅威状況や愛着関係）においてのみ見受けられるものであるという見解もある。しかしながら、青年期の愛着スタイルが、幼児期からこれまでの経験によって培われてきた信念や期待といった心的な表象（内的作業モデル）による個人差であることを考慮すれば、より一般的な社会的状況においても愛着スタイル間の違いは見受けられるものと考えられる。実際、最近の研究では、日常的な生活や一般的な対人関係場面においても、愛着スタイル間の違いが見られるという報告 (Pietromonaco & Barrett, 1997) があることから、本研究においても、青年期の愛着スタイルは、一般的な感情の調節や感受性、また、コーピングスタイルとの関連性を示し得るものと考えられる。

これらのことから、本研究では、まず、研究1で、青年期の愛着スタイルと感情の表出、統制、感受性との関連について検討を行い、その後、研究2で、青年期の愛着スタイルと対人関係におけるストレスコーピングとの関連を検討する。ただ、本邦での青年期の愛着スタイルに関する研究知見

は、これまでにそれほど蓄積されているとは言い難く、また、その草分け的な研究として知られる 詫摩・戸田 (1988) においては、愛着スタイルは Hazan & Shaver (1987) や Bartholomew & Horowitz (1991) のようにカテゴリーカルなものとしてではなく、特性的な概念として捉えられている。このような愛着スタイルへの特性的なアプローチは、安定型、アンビバレント型、回避型の3つの愛着スタイル傾向と他の諸変数との概念的な関連について、その方向性と強度に関する検討を可能にするものの、元来、愛着スタイル研究において焦点化されてきた各愛着スタイル間の差異ならびにその質的な違いについての検討を困難なものとする。それゆえ、愛着スタイルの相違に注目する場合は、前述した愛着次元を軸とするカテゴリーカルな視点から愛着スタイルを捉える必要がある。このような二つの観点から愛着スタイルを捉えることは、本研究での検討をより詳細なものとし、また、日本での青年期の愛着スタイルという概念の適用可能性についても示唆が得られるものと考えられる。これらのことから、本研究では、特性としての3つの愛着スタイル（安定型・アンビバレント型・回避型）と愛着次元（研究1では“自己モデル”・“他者モデル”，研究2では“親密性回避”・“関係不安”）の双方から仮説を設定し、それらの検討を行うこととした。

## 研究1

まず、研究1では、感情の表出や統制、感受性を測定する尺度として、ノンバーバルスキル尺度 (和田, 1992) を用い、それらと青年期の愛着スタイルとの関連について検討する。ノンバーバルスキル尺度は、感情のノンバーバル表出性、統制、感受性の3つの下位尺度からなる。和田 (1991) によると、表出性とは、“自分の感情状態などを上手く他者に表せるかどうかの能力”，統制とは、“自分の感情状態を他者に読まれたくない場合などに、それを意識的に統制する能力”，また、感

4) 愛着スタイルと感情経験との関連は、青年期と幼年期の愛着スタイルと概念的な一貫性を考える上で重要なものではあるが、問題部分で述べたようにそれらの関連性は、これまで多数の研究で一貫した結果が得られていることから、本研究での検討対象には含めなかった。

受性とは、“相手が何を伝えようしているのか、もしくはどのような感情状態にいるのかを読み取る能力”のことを指す。

研究1の主な仮説は以下のとおりである。なお、1-1と1-2は、愛着スタイル特性からの仮説、2-1および2-2は愛着次元（“自己モデル”・“他者モデル”）からの仮説である。

- 1-1. 不安定な愛着傾向は、先行研究 (Feeney, 1999) で諸感情の表出を統制する傾向があることが示されていることから、本研究でも不安定型の愛着スタイル傾向は、ノンバーバル表出性とは負の、統制とは正の関連を示すものと思われる。反対に、安定型の愛着傾向は、不安定型の愛着傾向とは逆の傾向を示すであろう。
- 1-2. 安定的な愛着傾向は、愛着対象のストレス状態を上手く読み取り、適切なサポートを与えやすい (Simpson et al., 1992; Simpson, Rholes, Orina & Grich, 2002) という先行研究の結果から、安定型の愛着傾向は、他者の感情を的確に読み取りやすいことが予測されるため、感受性とは正の関連を示すであろう。反対に、不安定型の愛着スタイルは、適切なケアギビング (caregiving: 相手への援助やいたわりを示すこと) の低さを予測していた (Collins & Feeney, 2000) ことから、不安定型の愛着スタイル傾向は、感受性とは負の関連を示すであろう。
- 2-1. Feeney (1995) では、他者モデルと同次元と見なされる親密性からの回避は、感情の統制の高さを予測していたことから、本研究においても、“他者モデル”は、ノンバーバル表出性および統制と関連性を示し、“他者モデル”の高い (親密性からの回避が低い) 群は低い群よりも、表出性は高く、反対に、統制は低くなるものと思われる。
- 2-2. 上述したように Bowlby によれば、他者の感情についての感受性は、愛着次元の自己モ

デルの発達と関連するとされる。それゆえ、ノンバーバル感受性については、“自己モデル”が高い (関係への不安が低い) 群では、それが低い群と比べて、感受性が高いという“自己モデル”の主効果が得られるであろう。

## 方 法

**回答者と実施方法** 近畿圏、首都圏および北海道の6つの大学において心理学関係の講義を受講している学生を対象にして調査を行った。総数471名の回答を得たが、回答に不備のある者11名を除外し、男性258名、女性202名の計460名 (平均年齢19.84歳;  $SD=1.36$ ) を分析対象者とした。調査時期は、2001年10月~11月であった。

**調査内容** 質問項目は以下のとおりである (回答者のデモグラフィックな特徴を問う項目群は表紙に配置し、学年、年齢および性別を記入させた)。

1. 成人の愛着スタイル尺度 (詫摩・戸田, 1988; 戸田, 1988)  
 青年・成人期における安定型、アンビバレント型、回避型の3つの愛着スタイル特性を測定するための尺度である。回答者は、各愛着スタイル特性について5項目、計15項目に対して“全く当てはまらない=1”から“非常によく当てはまる=7”の7件法で評定を行った。
2. 対人関係尺度 (Bartholomew & Horowitz, 1991)

成人の愛着の4カテゴリー・モデルでの自己モデルならびに他者モデルの2つの愛着次元軸を測定するため、邦訳を行ったものを用いた。回答者は、4つの愛着スタイル (“安定型”, “とらわれ型”, “回避型”, “恐怖型”) の主要な特徴を描写した各文章に対して、それらが自分自身にどの程度当てはまっているかを“全く当てはまらない=1”から“非常によく当てはまる=7”の7件法で評定を行った。また、愛着の2つの次元軸得点の算出については、Scharfe & Bartholomew (1994) の方法に従った<sup>5)</sup>。なお、本邦における愛着の次元

軸の適応可能性については、金政・大坊(2003)によって検討がなされており、その妥当性が示されている。

### 3. ノンバーバルスキル尺度(和田, 1992)

ノンバーバルによる感情の表出性や統制, また, 相手のノンバーバルに関する感受性を測定する尺度であり, 各下位尺度について5項目, 計15項目から構成される。回答者は, “当てはまらない=1”から“よく当てはまる=5”の5件法による評定を行った。

以上の尺度と合わせて, 精神的健康(GHQ; 中川・大坊, 1996)に関連する尺度などを用いて調査を行ったが, ここではそれらの尺度については報告しない。

## 結果

**各尺度の因子分析** 成人の愛着スタイル尺度, ノンバーバルスキル尺度ともに先行研究と同様, 3因子の抽出を行い, 反復主因子法, Promax回転による因子分析を試みた。その結果, 両尺度とも先行研究で得られた結果と同様の因子のまとまりが確認された。また, 両尺度の下位尺度の信頼性係数は, 前者で.67~.86, 後方で.58~.78であり, 先行研究とほぼ同程度のものであった。このことから, 両尺度の各因子の得点を, 先行研究と同様に, 各因子に対応する項目の評定尺度値の平均で算出した。

**愛着スタイル特性とノンバーバルスキルとの関連** 愛着スタイル特性とノンバーバルスキルとの関連性についての検討を行うため, 愛着スタイル

とノンバーバルスキルの各下位尺度得点との間の相関関係を求めた。その結果(Table 1), 安定型の愛着スタイル傾向は, ノンバーバル感受性, 表出性と有意な正の相関を示しており, 反対に, アンビバレント型傾向は, それらと有意な負の相関があった。また, 回避型傾向は, 感受性と統制とは正の, 表出性とは負の相関を示していた。

これらの結果は, 仮説の1-1および1-2を概ね支持するものである。しかしながら, 回避型傾向とノンバーバル感受性との間に正の相関が見られたこと, ならびにノンバーバル統制と3つの愛着スタイル傾向との間にほとんど相関が見られなかった点については仮説を支持するものではなかった。

**愛着の次元軸からの分析** 次に, 愛着の2つの次元軸とノンバーバルスキルとの関連の検証を行うため, “自己モデル”および“他者モデル”得点を算出し, それらの得点を基に, 回答者数が各々のモデルでほぼ同数になるように高群・低群の2群に分割した。なお, 両モデルの得点の平均および標準偏差は, “自己モデル”で $M=-1.02$ ;  $SD=3.49$ , “他者モデル”で $M=0.75$ ;  $SD=3.35$ , また, 2つのモデル得点の相関関係は $r=.03$ , *ns.*であった。

“自己モデル”および“他者モデル”の高群・低群を要因とし, ノンバーバルスキル尺度の各下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果(Table 2), ノンバーバル感受性

**Table 1** 愛着スタイルとノンバーバルスキルの各下位尺度得点の相関関係

	愛着スタイル尺度		
	安定型傾向	アンビバレント型傾向	回避型傾向
ノンバーバルスキル			
感受性	.30***	-.19***	.22***
統制	.07	.01	.11*
表出性	.23***	-.24***	-.25***

$N=458$

\*\*\* $p<.001$ , \* $p<.05$

5) “自己モデル”得点は, ポジティブな自己モデルを持つ“安定型”と“回避型”得点を足し合わせたものからネガティブな自己モデルを持つ“とらわれ型”と“恐怖型”得点を引くことで算出され, “他者モデル”得点は, ポジティブな他者モデルを持つ“安定型”と“とらわれ型”得点を足し合わせたものからネガティブな他者モデルを持つ“回避型”と“恐怖型”得点を引くことで算出される。各愛着スタイルへの評定値が7件法であることから, 両愛着次元の得点の最高値は12, 最低値は-12となる。

**Table 2** 自己・他者モデルの高・低群におけるノンバーバルスキル得点

愛着次元	自己モデル (関係への不安)			
	高群		低群	
	高群	低群	高群	低群
ノンバーバルスキル	<i>n</i> =148	<i>n</i> =111	<i>n</i> =108	<i>n</i> =93
感受性	2.59 (0.69)	2.71 (0.74)	2.54 (0.77)	2.43 (0.76)
統制	2.99 (0.78)	3.28 (0.91)	3.19 (0.87)	3.13 (0.94)
表出性	3.32 (0.78)	3.13 (0.82)	3.42 (0.91)	2.96 (0.91)

カッコ内は標準偏差.

については、“自己モデル”得点の有意な主効果が見られ ( $F(1, 456)=4.89, p<.05$ )，“自己モデル”高群は、低群よりも感受性得点が高かった。また、表出性では、“他者モデル”得点の有意な主効果が見られており ( $F(1, 456)=15.39, p<.001$ )，“他者モデル”の高群は、低群よりも表出性得点が高いことが示された。つまり、他者を肯定的に捉えている場合には、感情のノンバーバル表出性は高くなると言える。これらの結果は、仮説 2-1 の一部、および仮説 2-2 を支持する結果であろう。

また、ノンバーバル統制については、“自己モデル”と“他者モデル”の交互作用が見られ ( $F(1, 454)=4.66, p<.05$ )、単純主効果の検定の結果、“自己モデル”の高群において、“他者モデル”の高群、低群に有意な差が見られた ( $p<.05$ )。すなわち、ノンバーバル統制に関しては、自己への評価が高い場合にのみ“他者モデル”の影響が認められ、他者を肯定的に捉えているほど統制が低くなっていた。この結果は、仮説 2-1 が“自己モデル”の高群においては支持されたことを示すものである。

### 考察

研究 1 では、青年期の愛着スタイルと感情の表

出性や統制、感受性との関連を検討するために、ノンバーバルスキルという概念を用いて、それらの関連性の検討を行った。また、その際、愛着スタイル特性ならびに愛着次元軸、双方の視点から分析を行ったが、その結果は、1-1, 1-2, 2-2, 2-1 の 4 つの仮説を概ね支持するものであった。

しかしながら、愛着スタイル傾向とノンバーバル統制との関連については、それらの間にほとんど相関関係が認められず、回避型との間にのみ若干の正の相関が見られただけであった。この点については、仮説 1-1 を積極的に支持するものではなかったと言える。しかし、愛着次元軸の分析の結果からは、ノンバーバル統制について、“自己モデル”と“他者モデル”の交互作用が認められており、“自己モデル”の高群においては“他者モデル”の高群、低群の間に有意な差が見られ、“他者モデル”低群においてその得点が高かった。このような結果は、自分への評価が低い場合には、その自信のなさや関係への不安から、感情を表出しないことによって他者が自分から離れていってしまうことに恐れを抱き、自身の感情状態を積極的に統制することを避けるが、反対に、自己への評価が高い場合には、そのような懸念がなくなり、親密性からの回避が高ければ、他者に自分の感情状態を知られまいとして、意識的に感情状態の統制を行うといったことが示されたものと考えられる。これは、Bartholomew (1990) でも議論されているように、幼児期の回避行動は、親密さへの恐れと欲求との間の葛藤から引き起こされているものであることから (Ainsworth et al., 1978)、幼児期の回避型の愛着スタイルは、青年期の 4 類型での“恐怖型”と対応し、それらは、回避の発生過程において、青年期の“回避型”とは弁別され得ることを示唆する結果であると言える。

また、愛着スタイル特性の回避型傾向とノンバーバル感受性との間に正の相関が見られたことも仮説 1-2 を支持しない結果であった。ただ、愛着次元からの分析では、感受性について、“他者



モデル”の影響は認められず，“自己モデル”において有意な主効果が見られており，“自己モデル”高群の感受性得点は，低群のそれよりも高いという結果が示された。つまり，これらの結果から，他者の感情状態を読み取れているかどうかといったノンバーバル感受性は，自分を肯定的に捉えているかどうかの影響が大きいと考えられる。この結果は，問題の部分で触れたように自己モデルの発達には，養育者の受容性や反応性を幼児がどのように受け入れているかという感受性が重要であるとする Bowlby の主張と一貫するものと言えるであろう。

## 研究 2

研究 2 では，青年期の愛着スタイルと対人関係におけるストレスコーピングとの関連についての検討を行う。対人関係におけるストレスコーピングを測定するための尺度としては，短縮版対人ストレスコーピング尺度（加藤，2002）を用いた。短縮版対人ストレスコーピング尺度は，ポジティブ関係コーピング，ネガティブ関係コーピング，解決先送りコーピングの 3 つの下位尺度からなる尺度である。先行研究（加藤，2002）では，ネガティブ関係コーピングを用いやすいほど，後のストレス反応や孤独感が増大しやすく，反対に，解決先送りコーピングを用いた場合には，後のストレス反応や孤独感は低下しやすいことが示されている。また，ポジティブ関係コーピングは，後の孤独感や友人関係の満足度を予測し，ポジティブ関係コーピングを用いやすいほど，孤独感は低下，満足度は増加するという傾向が見られていた。

これらのことから，研究 2 での青年期の愛着スタイルと対人ストレスコーピングとの関連についての仮説を以下のように設定した。なお，仮説 1 は愛着スタイル特性について，仮説 2 は愛着次元（“関係不安”・“親密性回避”）についての仮説である<sup>6)</sup>。

1. 安定型の愛着スタイルは，ストレス時に他者

にサポートを求めやすく，建設的な反応を表しやすい (Feeney, Noller & Roberts, 2000) といったことから，本研究でも，安定型傾向は，ポジティブ関係コーピングとは正の，ネガティブ関係コーピングとは負の関連を示すものと思われる。

反対に，不安定型の愛着スタイルは，ストレス時において適切なサポートを求めにくく (Mikulincer, Florian & Weller, 1993; Simpson et al., 1992)，また，葛藤時に建設的ではない反応を示しやすい (Feeney et al., 2000) ことから，アンビバレント型や回避型の愛着傾向は，ポジティブ関係コーピングとは負の関連を，ネガティブ関係コーピングとは正の関連を示すものと思われる。さらに，アンビバレント型の愛着スタイルは，関係への不安が高く，脅迫的な感情を感じやすいといった特徴を持つ (Hazan & Shaver, 1987) ことから，対人関係の問題にも焦燥感を感じ，解決を先送りにすることが出来ないと考えられる。それゆえ，アンビバレント型傾向は，解決先送りコーピングとは負の関連を示すものと思われる。

2. これまでの研究 (Mikulincer & Florian, 1998; Westmaas & Silver, 2001) では，ネガティブな自己モデル（関係への不安の高さ）は，ストレスフルな出来事をうまく処理できなくさせるといった報告がなされていることから，本研究でも，ポジティブ関係コーピング，ネガティブ関係コーピング，解決先送りコーピングの 3 つの下位因子に“関係不安”の主効果が見られ，ポジティブ関係コーピング，解決先送りコーピングでは，“関係不安”高群（自

6) 研究 2 では愛着の 2 つの次元について“関係不安”，“親密性回避”での測定を行った。なお，これまでの成人の愛着スタイル研究においては，“関係不安”は研究 1 での“自己モデル”と，“親密性回避”は“他者モデル”と対応する次元として議論されてきている。



己への評価の低い群)は、低群と比べて、それらの得点が低く、反対にネガティブ関係コーピングでは、“関係不安”高群で、その得点は高くなるものと考えられる。

ただ、ストレス下において、サポートを求めるかどうかについては、親密性回避の影響が見られたという報告 (Simpson et al., 1992) もあるため、ポジティブ関係コーピングについては、“関係不安”の主効果と同時に“親密性回避”の主効果も見られ、“親密性回避”高群(他者への評価の低い群)において、ポジティブ関係コーピングの得点は低くなるものと考えられる。

## 方法

**回答者と実施方法** 近畿圏の4つの大学において心理学関係の講義を受講している学生を対象に調査を行った。総数407名の回答を得たが、回答に不備のあった者を除いた男性181名、女性212名の計393名(平均年齢19.59歳;  $SD=1.36$ )を分析の対象者とした。調査時期は、2003年1月であった。

**調査内容** 質問項目は以下のとおりである(学年、年齢および性別など回答者のデモグラフィックな特徴を問う項目群は表紙に配置した)。

1. 成人の愛着スタイル尺度(詫摩・戸田, 1988; 戸田, 1988)

研究1と同様、回答者は、各愛着スタイル特性について5項目、計15項目に対して“全く当てはまらない=1”から“非常によく当てはまる=7”の7件法で評定を行った。

2. 一般他者版 ECR (the Experiences in Close Relationships inventory) (中尾・加藤, 2002)

これまで議論の多かった成人の愛着次元軸の測定尺度について、Brennan et al. (1998) は、既存の尺度をまとめるための試みとして、これまでの成人の愛着スタイル尺度(計323項目)に対して因子分析を行い、36項目からなる尺度を作成した。この尺度の邦訳版(一般他者版 ECR)は、中

尾・加藤(2002)によって作成されており、その妥当性が検討されている。一般他者版 ECR は、愛着の2つの次元軸、すなわち、自己モデルと対応する関係不安(18項目)ならびに他者モデルとしての親密性回避(13項目)を測定するための尺度であり、31項目からなる。回答者は各項目に対して、それらが自分自身にどの程度当てはまっているかを“全く当てはまらない=1”から“非常によく当てはまる=7”の7件法によって評定を行った。

この一般他者版 ECR と研究1で用いた対人関係尺度との関連性については、中尾・加藤(2004)で二度の調査によって検討がなされており、両尺度の各愛着次元得点は、それと概念的に対応するもう一つの愛着次元得点とかなり高い相関関係が見られており、両尺度の信頼性ならびに概念的な妥当性が示されている<sup>7)</sup>。研究2では、内的整合性の検討が可能であり、また、既存の愛着スタイルの測定尺度を総括し、最近の愛着スタイル尺度の基準的なものとなり始めている (Fraley, Garner & Shaver, 2000) との理由から、愛着の2次元軸を測定するための尺度として一般他者版 ECR を採用することとした。

3. 短縮版対人ストレスコーピング尺度(加藤, 2002)

加藤(2000)で作成された対人ストレスコーピング尺度の短縮版であり、ストレスに対する対処行動の測定を行う。上述したように、短縮版対人ストレスコーピング尺度は、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの3つの下位尺度からなり、各下位因子について5項目、計15項目から構成される。回答者は、“あてはまらない=0”から“よくあては

7) 中尾・加藤(2004)の研究では、一般他者版 ECR と対人関係尺度との間に、“自己モデル”では.65、“他者モデル”では.66とかなりの高い相関関係があることが示されており、さらに、両尺度の再テスト信頼性の高さについても議論がなされている。

まる=3”の4件法による評定を行った。

以上の尺度と合わせて、精神的健康（GHQ; 中川・大坊, 1996）に関連する尺度などを用いて調査を行ったが、ここではそれらの尺度については報告しない。

## 結果

**各尺度の因子分析** 成人の愛着スタイル尺度、短縮版対人ストレスコーピング尺度ともに先行研究と同様、3因子の抽出を行い、反復主因子法、Promax回転による因子分析を試みた。その結果、両尺度とも先行研究で得られた結果と同様の因子のまとまりが確認された。両尺度の下位尺度の信頼性係数は、成人の愛着スタイル尺度で.68~.85、短縮版対人ストレスコーピング尺度で.77~.84であり、先行研究とほぼ同程度のものであった。

また、一般他者版 ECR についても、先行研究と同様に、2因子の抽出を行い、反復主因子法、Promax回転による因子分析を試みた。その結果、“親密性回避”の1項目が対応する因子に多少低い負荷を示していた点を除いては先行研究と同様の因子のまとまりが確認された。なお、確認として、愛着の2次元軸の“関係不安”ならびに“親密性回避”の信頼性係数を算出したところ、順に、 $\alpha=.90$ 、.84と比較の高い値を示していた。

これらのことから、上記の3つの尺度に関して、先行研究と同様に各下位因子に対応する項目の評定値の平均を算出し、それらを得点として以後の分析に用いた。

**愛着スタイル特性と対人ストレスコーピングとの関連** 愛着スタイル特性と対人ストレスコーピングとの関連について検討するため、研究1と同様に愛着スタイルと対人ストレスコーピングの各下位尺度得点との間の相関関係を求めた。その結果 (Table 3)、安定型の愛着スタイル傾向は、ポジティブ関係コーピングと有意な正の相関関係を、ネガティブ関係コーピングとは有意な負の相関関係を示していた。アンビバレント型傾向は、ネガティブ関係コーピングとは有意な正の相関が、解

**Table 3** 愛着スタイルと対人ストレスコーピングの各下位尺度得点の相関関係

	愛着スタイル尺度		
	安定型傾向	アンビバレント型傾向	回避型傾向
コーピングスタイル			
ポジティブ関係コーピング	.29***	-.08	-.02
ネガティブ関係コーピング	-.19***	.13**	.22***
解決先送りコーピング	.05	-.14**	.06

N=390

\*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$

決先送りコーピングとは有意な負の相関があり、また、回避型傾向は、ネガティブ関係コーピングと有意な正の相関関係を示した。

これらは、不安定型の愛着スタイルが、ポジティブ関係コーピングと有意な負の相関を示さなかった点を除けば、仮説1を支持する結果である。

**愛着の次元軸からの分析** 次に、愛着の2つの次元軸と対人ストレスコーピングとの関連の検証を行うため、“関係不安”ならびに“親密性回避”の得点を基に、回答者数が各々の愛着次元軸でほぼ同数になるように高群・低群の2群に分割した。なお、愛着の2次元軸得点の平均および標準偏差は、“関係不安”で $M=3.74$ ;  $SD=0.93$ 、“親密性回避”で $M=3.84$ ;  $SD=0.88$ であり、また、2つの次元軸得点の相関関係は $r=-.01$ , *ns.*であった。

次に、“関係不安”および“親密性回避”の高群・低群を要因とし、対人ストレスコーピング尺度の各下位尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行った。その結果 (Table 4)、ポジティブ関係コーピングについては、“親密性回避”得点の有意な主効果が見られ ( $F(1, 386)=5.10$ ,  $p<.05$ )、“親密性回避”高群は、低群よりもポジティブ関係コーピング得点が低かった。また、ネガティブ関係コーピングでは、“関係不安”得点の有意な主効果 ( $F(1, 386)=5.16$ ,  $p<.05$ )、ならびに“親密

**Table 4** 関係不安・親密性回避の高・低群における対人ストレスコーピング得点

愛着次元	関係不安 (自己への評価)			
	高群		低群	
	親密性回避 (他者への評価)			
	高群	低群	高群	低群
コーピングスタイル	n=100	n=96	n=92	n=102
ポジティブ関係コーピング	1.08 (0.69)	1.25 (0.69)	0.96 (0.64)	1.11 (0.77)
ネガティブ関係コーピング	1.07 (0.78)	1.02 (0.79)	1.00 (0.68)	0.75 (0.71)
解決先送りコーピング	1.36 (0.74)	1.33 (0.76)	1.49 (0.77)	1.51 (0.74)

カッコ内は標準偏差.

性回避”の主効果が見られ ( $F(1, 386)=3.86, p=.05$ ), 両モデルの高群は, 低群よりもネガティブ関係コーピング得点が高いことが示された. さらに, 解決先送りコーピングでは, “関係不安”得点の有意な主効果が見られており ( $F(1, 386)=4.45, p<.05$ ), “関係不安”高群は, 低群よりもその得点が低かった.

これらの結果は, ポジティブ関係コーピングで“関係不安”の主効果が見られなかったこと以外は, 仮説の2を概ね支持する結果である.

**考 察**

研究2では, 青年期の愛着スタイルと対人ストレスコーピングとの関連について愛着スタイル特性ならびに愛着次元 (“関係不安”・“親密性回避”) から検討を行った.

その結果, 愛着スタイル特性についての仮説1は, 不安定型の愛着スタイルがポジティブ関係コーピングとの関連を示さなかったことを除けば, ほぼ支持された. このことから先行研究で示された不安定型の愛着傾向の不応性 (金政・大坊, 2003; Mikulincer et al., 1993) は, 対人関係においてポジティブなコーピングが使用できないということよりも, ネガティブなコーピングを用いてし

まうことによって引き起こされるのではないかということが示唆される.

また, アンビバレント型傾向が, 解決先送りコーピングとは負の関連を示していたことは, アンビバレント型愛着の理論的定義である「過度の欲求と拒否不安」(Bowlby, 1973/2000) から理解されるものであろう. つまり, アンビバレント型傾向が強い場合, 関係への不安と親密さへの欲求から対人関係における問題を先送りにすることが出来ないと考えられるのである. 先行研究 (加藤, 2002) で, 解決先送りコーピングが, 後のストレス反応や孤独感の低下を予測していたことを考慮すると, 先行研究 (金政・大坊, 2003; Mikulincer et al., 1993; Simpson et al., 1996) で示されたアンビバレント型の高い不応性は, ストレスフルな問題に対して過度に焦点を当てすぎ, 問題の解決を先に延ばせないために起こったと推測される.

愛着次元からの分析では, 仮説2は概ね支持されていた. ネガティブ関係コーピングと解決先送りコーピングについては, “関係不安”の主効果が見られており, ネガティブ関係コーピングでは, “関係不安”が高い場合にその得点が高くなり, 解決先送りコーピングでは, その反対の傾向が見られた. これらの結果は, 上述の愛着スタイル特性での分析で, 拒否不安といった特徴を持つアンビバレント型傾向 (Bowlby, 1973/2000) がネガティブ関係コーピングとは正の, 解決先送りコーピングとは負の関連を示していたこと, ならびに, 先行研究のネガティブな自己モデル (関係への不安の高さ) は, ストレスにうまく対応できなくさせるといった報告 (Mikulincer & Florian, 1998; Westmaas & Silver, 2001) と一貫する. ただ, 仮説とは異なり, ポジティブ関係コーピングについては, “親密性回避” (他者への評価) の主効果は見られなかったものの “関係不安” の影響は見られなかった. この結果は, ポジティブ関係コーピングが, 対人関係のストレスフルな出来事におけるネガティブさを回避するというものではなく, その状況で相

手（他者）を肯定的に捉えることができるかどうかという対処行動と関連するためであろう。さらに、ネガティブ関係コーピングについても“関係不安”の影響と共に、“親密性回避”の主効果が見られており、不安定な愛着傾向（“関係不安”ならびに“親密性回避”の高さ）は、ネガティブ関係コーピングの使用しやすさを予測していた。これらの結果は、SSPにおいて、安定的な愛着スタイルの子どもと不安定な愛着スタイルの子ども（回避や不安の高い子ども）が、母親との再会時のネガティブな反応の取りやすさによって弁別されていることと概念的に一貫すると共に、愛着の2つの次元軸が、異なった種類の対人ストレスコーピングに異なった影響を及ぼすことを示すものであろう。

### 総合的考察

本研究では、青年期の愛着スタイルについて、愛着スタイル特性と愛着次元の双方の視点から、研究1では、“自己・他者モデル”と感情の表出、統制、感受性との関連について、研究2では、“関係不安”・“親密性回避”と対人関係におけるストレスコーピングとの関連についての検討を行った。その結果は、青年期の愛着スタイルと幼児期における愛着スタイルの概念的な一貫性をほぼ支持するものであったと言える。

全体を通してみた場合、安定型の愛着スタイル傾向は、ノンバーバル感受性および表出性、ポジティブ関係コーピングと正の関連を示しており、また、ネガティブ関係コーピングとは負の関連を示していた。これらの結果は、安定型愛着スタイルの幼児が、ストレス状況下(SSP)での養育者との関係において、容易に感情表出を行い、また、比較的適切なコーピング行動を取りやすかったという報告と整合する(Ainsworth et al., 1978)。同様に、成人の愛着研究においても、安定的な愛着傾向は、感情の表出性の高さ(Feeney, 1999)や適切なストレス処理(Simpson et al., 1992, 1996)との関

連が示されており、また、愛着対象に対して適切なサポートを与えやすい(Simpson et al., 1992, 2002)といった報告もあることから、安定型の愛着傾向の対人関係における適応性の良さが本研究の結果においても示されたと言えるであろう。

また、安定型傾向とは対照的に、アンビバレント型の愛着スタイル傾向は、ノンバーバル感受性および表出性とは負の関連を、ネガティブ関係コーピングとは正の関連を示していた。さらに、解決先送りコーピングとも負の関連が見られている。これらの結果は、Ainsworth et al. (1978)のSSPで、アンビバレント型の幼児がうまくストレスの処理を行えず、また、母親との再会に際して自身の感情の表出に困難を伴っていたという報告と一貫性を持つものである。アンビバレント型愛着スタイルの対人関係における適応性の低さは、成人の愛着研究においてもこれまで多数の報告がなされており(金政・大坊, 2003; Mikulincer et al., 1993; Simpson et al., 1996)、その愛着特徴である親密性への過度の欲求と拒否不安(Bowlby, 1973/2000)間の葛藤(アンビバレント性)がそのような適応性の低さを招くのではないと考えられる。

回避型については、感情のノンバーバル表出性とは負の関連を、ネガティブ関係コーピングとは正の関連が見られ、これらはSSPでの回避型の幼児が母親との分離に対して感情をほとんど表出せず、また、再会に対しても母親に関心を示さず、無視していたという報告と一貫する(Ainsworth et al., 1978)。回避傾向は、成人の愛着研究においても、ストレス時の適切な感情表出の低さ(Simpson et al., 1992)や非効率なサポート探索(Collins & Feeney, 2000)を予測していたことから、本研究の結果は、回避型愛着の概念的特徴である「他者からの情緒的な隔たり」への嗜好が示されたものであろう。

愛着の次元軸からの分析では、特性として愛着スタイルを捉えた場合と整合性のある結果を示す

と共に、より詳細な部分の知見が得られたと言える。感情の感受性については“自己モデル”の主効果、表出性では“他者モデル”の主効果が得られており、自己への評価が高いほど感受性を高く評定しやすく、また、他者を肯定的に捉えているほど感情の表出性が高くなることが示された。つまり、愛着が安定的であるほど、感受性ならびに表出性が高くなっており、これらは、問題部分で触れた Bowlby の主張する内的作業モデルの形成過程、ならびに SSP での母親との再会時に不安定な愛着スタイルの子どもの感情の表出性が低かったことと一貫する。また、感情の統制性については、“自己モデル”、“他者モデル”の交互作用が見られ、自己への評価が高い場合にのみ、“他者モデル”の低さ（親密性からの回避の高さ）は、感情状態の意識的な統制性を予測していた。このような結果が得られたのは、自己への評価の高い人は、他者から見捨てられること、もしくは他者から拒否されることへの懸念が弱いため、親密性からの回避が直接的に感情統制に影響を及ぼし、他者に自分の感情状態を悟られまいとして統制を行うためではないかと考えられる。

また、対人ストレスコーピングのネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングに関しては、“関係不安”の主効果が見られ、関係への不安が高く自己を肯定的に捉えていない場合には、ネガティブ関係コーピングを使用することが多く、解決先送りコーピングを用いる可能性が低くなっていた。これらの結果は、先行研究（加藤，2002）で、ネガティブ関係コーピングが後の対人関係の適応性の低さを予測し、反対に、解決先送りコーピングは、後の適応性の高さを予測していたことを考慮に入れば、ネガティブな自己モデル（関係への不安の高さ）はストレスの処理を困難にさせているという先行研究（Mikulincer & Florian, 1998; Westmaas & Silver, 2001）の結果との整合性を見ることができる。さらに、この結果は、幼児期において不安定な愛着傾向（不安や回避の高

さ）の子どもが、SSP のようなストレス状況下で、適応的と見なされる反応を取りづらかったという報告とも一貫するものであろう。

ただ、仮説とは異なり、ポジティブ関係コーピングについては、“親密性回避”の影響は見られなかったが、“関係不安”の主効果は得られなかった。この結果は、ポジティブ関係コーピングが、対人ストレス時において、他者を肯定的に捉えられるか否かというコーピングスタイルであることから、他者への評価としての“親密性回避”の影響が強く表れたのではないかと考えられる。本研究の結果から、愛着の2つの次元軸は、対人関係のストレスコーピングをいくつかの側面で捉えた場合には、それらに異なった影響を及ぼしており、先行研究で示されていたようにネガティブな自己モデル（関係への不安）はストレスの処理を困難にさせるが、それと共に、ポジティブなコーピングを積極的に用いられるかどうかについては親密性からの回避（他者への評価の高さ）の影響が見られることが示された。

ここで、本研究における課題について触れておきたい。それは、本研究では、研究1と研究2で青年期の愛着スタイルを測定するために異なった尺度を使用したことにある。近年、成人・青年期の愛着スタイル研究で議論の対象となっている測定尺度の問題を受けて、本研究では両研究で異なった尺度を用いた。研究1で用いた Bartholomew & Horowitz (1991) の対人関係尺度については、これまで様々な研究においてその妥当性が検討されているものの (e.g., Pietromonaco & Barrett, 1997; Scharfe & Bartholomew, 1994)、前述したようにその内的整合性を問うことができないという問題を孕んでいる。その問題点を解消するために作成されたのが Brennan et al. (1998) の ECR であることから、研究2では愛着スタイルの測定に ECR を用いた。しかしながら、ECR の妥当性については未だ検討中であると言わざるをえず、必ずしも対人関係尺度よりもその優位性が保証さ

れたとは言い難い。また、それら双方の尺度の関連性については、中尾・加藤(2004)において比較的高い相関関係が得られてはいるものの、それらが同一の概念を測定しているかどうかについては未だ疑問の余地が残ると言える。それゆえ、本研究では、それらの尺度の愛着次元について、ある程度分化した形で議論を行ってきた。今後は、それら双方の尺度の関連性について、愛着に関連する他の諸変数との関係やそれらへの反応性を検討した上で、愛着スタイルの測定尺度についての議論を重ねていく必要があるであろう。

本研究では、青年期の愛着スタイルに関して、これまでの研究で報告されてきた父親や母親の印象、母親との分離経験についてだけでなく、感情表出や統制、感受性、ならびに対人関係におけるストレスコーピングとも概念的に整合する形での関連性が見られた。このことは、青年期と幼年期の愛着スタイル間の概念的な一貫性に関する新たな根拠を提出するものである。今後は、本研究の結果を踏まえ、愛着スタイルの継続性を考慮し、時間的展望をも視野に入れながら、対人関係の円滑さを予測できるようなモデルの構築を行っていく必要があるだろう。

#### 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, **7**, 147-178.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. 1969/2000 *Attachment and loss, Vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. 1973/2000 *Attachment and loss, Vol. 2: Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes. (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford. Pp. 46-76.
- Collins, N. L., & Feeney, B. C. 2000 A safe haven: An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1053-1073.
- Feeney, J. A. 1995 Adult attachment and emotional control. *Personal Relationships*, **2**, 143-159.
- Feeney, J. A. 1999 Adult attachment, emotional control, and marital satisfaction. *Personal Relationships*, **6**, 169-185.
- Feeney, J. A., & Noller, P. 1990 Attachment styles as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 281-291.
- Feeney, J. A., Noller, P., & Roberts, N. 2000 Attachment and close relationships. In C. Hendrick, & S. S. Hendrick (Eds.), *Close relationships*. Thousand Oaks, CA: Sage. Pp. 185-201.
- Fraley, R. C., Garner, J. P., & Shaver, P. R. 2000 Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory: Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 816-826.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 青年期の愛着スタイルと社会的適応性 心理学研究, **74**, 466-473.
- 加藤 司 2000 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, **48**, 225-234.
- 加藤 司 2002 短縮版対人ストレスコーピング尺度の信頼性と妥当性の検証 神戸女学院大学学生相談室, **7**, 17-22.
- Mikulincer, M., & Florian, V. 1998 The relationship between adult attachment styles and emotional and cognitive reactions to stressful events. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes. (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford. Pp. 143-165.
- Mikulincer, M., & Nachshon, O. 1991 Attachment styles and patterns of self-disclosure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 321-331.
- Mikulincer, M., Florian, V., & Weller, A. 1993 Attachment styles, coping strategies, and posttraumatic psychological distress: The impact of the Gulf War in Israel. *Journal*

- of Personality and Social Psychology*, **64**, 817-826.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1996 日本版 GHQ 精神的健康調査票手引 日本版 GHQ の短縮版：解説 日本文化科学社 Pp. 117-147.
- 中尾達馬・加藤和生 2002 Brennan et al. (1998) の成人愛着スタイル尺度の日本語版作成とその妥当性の検証 日本教育心理学会第 44 回総会発表論文集, 300.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- Pietromonaco, P. R., & Barrett, L. F. 1997 Working models of attachment and daily social interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1409-1423.
- Scharfe, E., & Bartholomew, K. 1994 Reliability and stability of adult attachment patterns. *Personal Relationships*, **1**, 23-43.
- Shaver, P. R., & Hazan, C. 1988 A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal Relationships*, **5**, 473-501.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Nelligan, J. S. 1992 Support seeking and support giving within couples in an anxiety-provoking situation: The role of attachment styles. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 434-446.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., Orina, M. M., & Grich, J. 2002 Working models of attachment, support giving, and support seeking in a stressful situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 598-608.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., & Phillips, D. 1996 Conflict in close relationships: An attachment perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 899-914.
- Stayton, D. J., & Ainsworth, M. D. S. 1973 Individual differences in infant responses to brief, everyday separations as related to other infant and maternal behavior. *Development Psychology*, **9**, 226-235.
- 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論から見た青年の対人態度——成人愛着スタイル尺度作成の試み 東京都立大学人文学報, **196**, 1-16.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル——作業仮説 (working models) からの検討 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 27.
- 和田 実 1991 対人的有能性に関する研究——ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成 実験社会心理学研究, **31**, 49-59.
- 和田 実 1992 ノンバーバルスキルおよびソーシャルスキル尺度の改訂 東京学芸大学紀要, **43**, 123-136.
- Westmaas, J. L., & Silver, R. C. 2001 The role of attachment in responses to victims of life crises. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 425-438.
- 2004. 4. 20 受稿, 2005. 1. 30 受理—



## **Early Adult Attachment Styles, Emotional Regulation and Sensitivity, and Interpersonal Stress Coping: An Examination of Conceptual Consistency in Infant and Early Adult Attachment Styles**

Yuji KANEMASA

Department of Human and Psychological Studies, Faculty of Humanities, Soai University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2005, Vol. 14 No. 1, 1-16

The purpose of this study was to examine the relationships among early adult attachment styles, emotional regulation, and interpersonal stress coping. In Study 1, the relationship between early adult attachment styles and emotional regulation was examined with 460 undergraduates. Results showed that secure attachment was positively related to emotional expression and sensitivity, but ambivalent attachment was negatively related to them. Also, analysis concerning attachment dimensions revealed that Anxiety was significantly associated with low emotional sensitivity, and Avoidance with low emotional expression. In addition, an interaction of Anxiety and Avoidance was associated with emotional control: it could be explained by Avoidance in cases of low Anxiety. In Study 2, the relationship between early adult attachment styles and interpersonal stress coping was examined with 393 participants. Results showed that secure attachment was positively related to positive relationship-oriented strategies, negatively related to negative relationship-oriented strategies, and insecure attachment, on the other hand, was positively related to negative relationship-oriented strategies. As for attachment dimensions, Anxiety appeared to have an influence on negative relationship-oriented strategies and postponed-solution coping, and Avoidance on positive relationship-oriented strategies. These results were discussed in terms of conceptual consistency in infant and early adult attachment styles.

**Key words:** early adult attachment styles, attachment dimensions, stress coping, nonverbal skill, emotion